ふれあいつながり かわら版

姫路市教育委員会
学校指導課
小中一貫教育・ICT教育推進係
(079)221-2120

中学進学を目の前にした子供たちに、身に付けさせたい力を育てるゲストティーチャーの招聘

令和六年一月二十九日(月)姫路市立野里小学校にて、芸術文化観光専門職大学学長平田オリザ氏をゲストティーチャーとして招聘し、6年生に、3時間授業が行われました。

平田学長は、演劇的手法を取り入れたワークショップを全国各地の小・中・高等学校で実践しています。豊岡市では市内全ての小中学校で演劇教育を導入し、「話合いが得意な子供が増える」「各授業での発言率が増える」といった成果を上げています。

学校で「演劇」と聞くと「学芸会」のようなものをイメージする人が多いと思います。野里小で、平田学長がされたワークショップは、「スキット」と呼ばれる短い台本を使って、子供たちが展開を考えていく形式のものでした。

野里小の６年生に演劇について説明

一時間目「役決めと台本（セリフ）の書き換え」

一時間目は、児童が5~6名ずつのグループに分かれて、与えられた台本を確認しながら、演じる役を決めていきます。役が決まったら、自分のセリフを言いやすいように書き換えたり、動きを考えて練習したりします。与えられた時間は短いですが、児童はグループで話し合い、全てのグループが全体の前で対話劇を発表しました。

平田学長からは「劇なので人を傷つけない限りどうエ夫してもよい。」「セリフを言いながら笑うと周りがしらけるので2分間集中して演じること。逆に劇を見ているときは笑ってもよい。」「最後までやり抜く力が大切になる。」といった指導がありました。

グループごとに対話劇を発表（１回目）

同じ台本の対話劇ですが、グループによってセリフや動きが少しずつ変化しているので、他のグループの発表も児童は最後まで興味深く鑑賞していました。一時間目の最後には、平田学長から各グループの対話劇の良かった点や改善できる点を端的に振り返る時間がありました。

平田学長から直接指導を受ける６年生

二時間目「一時間目の発表をもとにした台本の作成」

二時間目は、一時間目の発表を受けて自分たちで台本を考え、よりオリジナル性が増した「転校生が来た！」の台本を考えます。「良いものをつくりたい」というのはどのグループも同じで、自分たちでセリフを工夫したり、動きを工夫したりして、熱のこもった話合いが見られました。

平田学長からのアドバイス

- あえて仲良くする必要はありませんが、全員で取り組まないと劇だから成立しません。
- セリフや動きの工夫はサッカーのシュートと同じで、と真ん中を狙っても、枠を外れても決まらない。ゴールぎりぎりを狙うシュートが良いシュートなので、そこを意識しましょう。

セリフを考えるためにとことん話し合う

三時間目「劇の発表と振り返り、平田学長の講話」

一回目の対話劇の経験を生かして、二回目の発表には、各グループに「ボケとツッコミ」「三段落ち」「表情や声の大きさ」などの工夫が見られました。

振り返りでは、「自分たちのグループの良かったところ」「自分たちのグループの課題」「他のグループで良かったところ」を発表しました。良かったところとしては、「みんなで協力して役割分担できたところ」「話合いでアイディアがたくさん出たところ」「普段の自分の姿とは異なるキャラクターを演じることができたところ」などが発表されました。また、課題としては、「セリフのない部分をもっと工夫できたのではないか」「キャラクターが豹変するタイミングを後ろにするともっと笑いが取れたのではないか」といった感想が出されました。児童の発言からは、演じることを楽しんでいる様子が伺えました。

最後に、平田学長からは、話合いの時間配分についての振り返りがありました。

①「ジャンケンですぐに決めて良いこと」
②「2、3分で決めなければならないこと」
③「納得するまで話し合って決めること」

など、話合いでの優先順位の大切さについて指導がありました。また、「相手の意見を取り入れることで自分の意見も通りやすくなる。この『折り合いをつける』という経験で、社会に出た時に必要な合意形成能力が身に付く」という話がありました。

6年生の児童は、セリフを考えることや役を演じる体験からコミュニケーションの楽しさや、時間内に話し合って決めることの大切さを経験し、中学進学に向けて必要な力が身に付いたのではないでしょうか。

グループごとに対話劇を発表（２回目）

平田学長にお礼を伝える代表児童